元バカとテストと召喚獣＋カオスなFクラス

ノッポガキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
元バカとテストと召喚獣＋カオスなＦクラス

【Ｎコード】
Ｎ３２５９Ｚ

【作者名】
ノッポガキ

【あらすじ】
バカテスの再編です。
明久×瑞希なのでそれを許せる方のみお入りください。
基本、オリキャラは登場しないです。
玲が最初から登場してたり、Ｆクラスのメンバーが違っていたりとカオスなことになる予定です。

第一問　いままでのあらすじという名のプロローグ（前書き）

やってしまった……思いのほか筆が進むんだよ。

バカテストは要望があればやります。

ない場合は、気が向いたときだけたまーにやるかな？

第一問　いままでのあらすじという名のプロローグ

これは、僕が2年生に進級するまでの話だ。

ある日、葉月ちゃんって言う女の子が困っていて、それを助けるためにいろいろあったんだけど……それは割合。

問題なのは、葉月ちゃんが僕の頬にキスをしたあとのことです。

「明久くーん……何してるんですかぁ？」
「ひ、姫路さん……なんか笑顔が怖いよ！？」

そう、なぜか姫路さんがものすごく怖い笑顔で迫ってきたんだ。

「あれー？　なんで昔みたいに瑞希ちゃんって呼んでくれないんですかぁ？」
「い、いやその……」
「な・ん・で・で・す・か？」
「……み、瑞希ちゃん」
「よろしい♪」

いったい、何が起こっているんだ？

「それで、さっきのは一体どういうことですか？」
「いや、僕にも何がなんだか……」

「どういうことなんですか？」
「いや、だから……」
「どういうことなんですか？」
だからその笑顔はなんなの！？

「バカなおにいちゃんとキレイなおねえちゃんは恋人なんですか？」
そこで、葉月ちゃんが爆弾発言。
「ふぇぇぇ！？」
「い、いや、それちがっ」
「……じー」
なんか、半開きの目で睨まれているんだけど！？

「葉月は……諦めません！」
そう言って葉月ちゃんはどこかへ行ってしまった……何を諦めないんだろう？

「それで、明久君……ちょっとＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしましょうか」
「はい……」

そのあとの出来事は怖かったけど、姫路……瑞希ちゃんとまた話せ

るようになったのはうれしかった。

なぜかその日から毎日勉強を一緒にしているけど……なんでだろう？

そして、ある日の出来事。

それにしても、瑞希ちゃんはなんで僕に勉強教えてくれるんだろう？

（明久君と一緒のクラスになりたいからですよ）

なんだ？　なんか聞こえたような……

「瑞希ちゃん、何か言った？」

「いえ、何も言ってませんよ」

そのとき、インターホンがなる音がした。

「あ、はーい！」

玄関を開けると……姉さんが立っていた……なぜかメイド服姿で。

「って、姉さん！？」

「ただいま帰りましたアキ君」
「いや、なんでここにいるの！？」
「コチラで教師をすることになりまして、今日から私もここで暮らします」
「……Ｒｅａｌｌｙ？」
「はい」

なんてこった……

「明久君、どうかしたんですか？」

あ……しまったぁ！？

「アキ君？」
「姉さんこれは不順異性交遊じゃないんだ、一緒に勉強していただけなんだ、だから命だけは！！」
「……そうですか……一緒にお勉強を」

マズイマズイ……

「あの……」
「どうも初めまして、吉井明久の姉の吉井玲といいます」
「あ、はい。姫路瑞希といいます」

普通に会話しているけど……大丈夫か？

「それじゃあアキ君、いつものようにお医者さんごっこを」
「してないからね！？」
「明久君とお医者さんごっこをするのは私です！！」

「瑞希ちゃんもなに言ってるの！？」

とんでもないことを口にしてるよ！？

「そういえば、もうお昼ですね。アキ君、今日は姉さんが作ってあげましょう」

「いや、別にいい――って、間接を外さないでください！！」

なんでいきなり間接を外すの！？

「なら、いつものお礼で私が作りますね」

「え！？」

マズイマズイ……この前瑞希ちゃんの料理を食べたけど……あれはヤバイ。

命的意味で。

「それなら、二人で作ってアキ君に食べ比べてもらうというのはどうでしょうか？」

「ああ、それなら」

なんで、そんな最悪の方法で和解するの！？

「じゃあ、まっていてくださいね」

「アキ君、くれぐれもキッチンを覗かないでくださいね」

お、終わった……僕の命が……

結局、瑞希ちゃんや姉さんも自分が作った料理を食べてしまい、自分達の料理の危険性を理解は出来た……直るかどうかは別として。

頑丈な体で助かったとだけ言っておこう。

ギャグ補正な気もしないでもないが……

そして、ある日のこと……

「姉さんに無断で女の子を家に上げていたのですから罰を与えます」

といって……なぜか、文月の女子用の制服を着させられた。

「なんで、女装させられてるの！？」

「かわいいですよアキ君」

「そうですよ明久君」

「なんで瑞希ちゃんもいるんだ！？」

「私が呼びました」

「姉さん！？」

いつのまに！？

「それでは、お買い物に行きましょうか」

「そうですね」
「あの……僕の服は？」
「「今日は一日中その格好ですよ」」
「そ、そんなぁ！？」

ちなみに、二人は今日こそリベンジだと食材を買おうとしていたため、全力で二人が変なものを買わないようにしないといけなかった。
おかげで、自分の格好のことが頭から抜けていた。

「！？　見つけた……運命を……アキちゃんを！！」

途中、悪寒が走ったのは気のせいだと信じたい。

なんとか、危険なものを避けたけど……二人とも、食べられるものとそうでないものの区別ぐらいつけてよお願いだから。

「まったく、アキ君はそんな調子で今度の振り分けテストは大丈夫なんですか？」
「そうですよ、頑張って教えたんですからいい点とってくださいね」
うう、耳が痛い……

「大丈夫だよ、日本史と世界史なら瑞希ちゃんよりとれる自信はあるから！」

なんか、この二つだけは以上に成績が伸びた……理数系はそれほどでもないけど。

「まあ、今の成績なら……」

「そうですね、アキ君は頑張りました。ですが、本番で名前の欄にアレキサンドレス大王とか書きそうで心配です」

「いくらないんでもそんなミスはしないから！！」

大丈夫……のはずだ。

「そういえば、姉さんはどこの学校の教師になるの？」

「文月学園ですよ。いいませんでしたか？」

「初耳だよ！！！」

っていうか、なんでよりにもよって！？

「アキ君が心配だったからに決まっているじゃないですか」

「そんな理由！？」

「あと、ついでに大学のほうに誘いが来ていたんですけどね」

「そっちを理由にするべきだよ？！」

この姉は勉強だけは出来るからな……そのぶん、一般常識に欠けるけど。

そして、振り分け試験当日。

瑞希ちゃんが熱を出してしまい、試験どころではなかった。

「はぁ、はぁ……退席、します」

「姫路、振り分け試験を途中退席すると０点だぞ」

「……そんなのおかしいじゃないですか！！」

「吉井、貴様も無得点扱いにするぞ」

「ぐ、それでもいいです。行こう瑞希ちゃん」

「明久、君……」

僕は瑞希ちゃんを背負い、保健室へ向かった。

「ごめんなさい……私のせいで……明久君も頑張ったのに」

「いいんだよ、それに……」

「それに？」

「瑞希ちゃんとおなじクラスのほうがうれしいし」

「……／／／／／」

「顔真っ赤だけど大丈夫？」

「平気です……／／／／／」

そして、ここから先は僕の知る由もない話だ。

僕達が途中退席したのを見て、ある三人の女の子があることを思いついてしまった。

「途中退席……Ｆクラス……雄二は絶対にＦクラスに行く……名前

を書かなければFクラス……雄二と一緒……」
「Fクラスならアキちゃんがいる……無得点ならアキちゃんとおなじクラス」
「お姉さまはたぶんFクラス……豚野郎度もがいるのは嫌ですが、お姉さまとおなじクラスのためなら！」

僕とは全く関係のない人もいたけど、何か、とんでもない出来事が起こったのは間違いない。

「まったくアキ君は」
「ごめん、姉さん」

その日、姉さんに怒られています……まあ、仕方がないよね。無得点扱いで0点だし。

「ですが、姉さんは誇らしいです。そこで何もしないよりはずっとマシだと思っていますよ」
「姉さん……ありがとう」

そして、今日から2年生だ。

「吉井、遅刻だぞ」

「て――西村先生、おはようございます」
「今、鉄人と言おうとしなかったか？」
「気のせいですよ」

まったく、するどい。

「それより言うことがあるんじゃないか？」
「えっと……今日も肌が……じゃなくて遅刻してスイマセン」
「肌がなんだって？」
「いえ、なにも」

「まったく、ほれお前のクラスだ」

そう言って、鉄人は封筒を手渡した。

「せっかく、成績も上げてきていたのに残念だったな」
「いえ、自分で選んだことですから」
「そうか……だが、俺はお前のしたことは人としてよかったと思うぞ」
「先生……ありがとうございます」
「ところで……お前の姉はいつもあんな感じなのか？」
「ええ……もう、諦めるしかないのかもしれません」
「……お前も苦労してるな」

封筒の中身は見ないでも分かっている……僕は封筒の中に書かれているクラスへ向かった。

僕の封筒の中にはこう書かれている。

『吉井明久　Ｆクラス』

こうして、僕らの最低クラスでの生活が始まったのだった。

第一問　いままでのあらすじという名のプロローグ（後書き）

次回はＦクラス。

どんなカオス展開になっているのやら。

感想お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3259z/

元バカとテストと召喚獣＋カオスなFクラス

2011年12月11日10時52分発行